

---

# 麻帆良戦記ディスガイア

イヤバカン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

麻帆良戦記ディスガイア

### 【Nコード】

N7582K

### 【作者名】

イヤバカン

### 【あらすじ】

魔王となり魔界を収めたもののやることなくなってしまったラハールは再び眠りについてしまった。そこに忍び寄る影！

調子にのって書き始めました。人生で2作目、特に勉強もしないまま筆を取り始めたので前と同じようにダメダメになる可能性も・・・でもがんばります。

## 超魔王捨てられる(前書き)

少々後悔している、でも書きたかったんだ！

キーワードに入れている『残念な描写あり』ってのは結構気に入ってるんだ

どうでもいいよね・・・ごめん

超魔王捨てられる

ドドドド・・・

ウイイイイイン・・・

パンッパンッパンッ・・・

死ねええええ・・・

ウルサイ、オレ様の部屋を改装するような予定などあったか？

まるで自分の隣で工事が行われているような・・・

ドリルの音かと思えばチェーンソーのような、中には銃声やらいかにもアホそうな声まで聞えたような。

くっそお小さい癖にいつの間にか頑丈になりやがって・・・あっそうだ捨ててきてしまえばいいんだ。

やっと静かになった、ただ急に冷えた。まあこの程度、超魔王になったオレ様には涼しい程度だがな。

さようなら魔王様！プリンの恨みは恐ろしいのだ！時空ゲートをこの世界以外のランダムにしようと・・・よし、でわ行ってらっしゃいませ魔王様、魔王城は私がもらっわっ！

ポイツ！

アホな声が聞えたと思ったらすぐに静かになった、これで静かに眠れ・・・る。

100年後

「ねえ、これは何かな？チャチャゼロ」

そこには、某魔神に捨てられてからも動くことなく寝続けた結果、砂に埋もれ、雨に晒され続けた結果、自称超魔王を名乗っている人物は100年の長い年月によって表面を石のように硬くなった土に覆われてしまっているのだった。

そしてそれを見つけたのは吸血鬼化してまだ十数年ほど、後のドールマスターの異名を持つことになるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとその従者チャチャゼロだった。

「サアナ、デモコノ魔力はスゲエゼ御主人。モツテ帰レバ何力使イ道ガアルカモシレネエゼ」

「言葉遣いはもうちょっとどうにかならないの？でもそうだね土に覆われているみたいだけど形から見るに人が入っているのかな？」

「御主人ハコレカラ何百年ト生キルンダゼ？言葉ナンテスグニ荒クナルツチマウツテ。ソレヨリコイツハ人ジャナイダロ、随分ト長い間ココニ横タワツテイタンダロウゼ、デナケリヤコンナ土ニ覆ワレネエツテ」

「言葉遣いは兎も角として。とにかくもって帰ろう、これだけの魔力を私が使えるようにできれば自分の身を守るのに使えるはず」

「アーアー、御主人ハ考エガ甘イゼ？マツ考エ方モ時間ガタテバ・・」

「もう、文句言わないで足を持って！もって帰るよ」

「ハイハイ」

それから100年後

「うーん、うまくいかない。なあチャチャゼロー100年も研究してなにか思いつかないか？」

「知ラネエヨ、ソレヨリモソイツノ魔力ヲ隠スアイテムヲ早く作ツテクレ。ヤツラ、ソイツノ魔力ニ気ガツイテウジャウジャ集マツテクルゼ」

「わかったわかった、でもこちらは100年も戦ってるんだ、国から軍でも出されない限り大丈夫だろ」

「最近ノ御主人ハマツタク戦ツテナイダロ！マア切り刻ムノモ悪アネエケドナ」

「おいつ言葉遣い！ったく100年行ってもわからないのかチャチャゼロ」

「・・・御主人モスグニコツチ側サ、マアイイ。掃除ニ行ツテクゼ」

「はいはいっすぐ終わらせて来いよ」

さらに100年後

「ったくこの土男、魔力はあるはずなのに多すぎて私の作ったアイテムが壊れるじゃないか。壊して意識が戻ると困るから手が出せないことをいいことに意識があるんじゃないか？」

「ケケケツ、御主人モ段々ト染マツテキタナ」

「ん？何んのことだ？」

「何デモネエヨ。ソレヨリ御主人、今回は軍ガ動イテルミテエダゼ？ チヨット俺一人ジャ敵シイゾ」

「ちっココに気がついたのか、別の場所を探さないとな。さっさと終わらせるか、行くぞチャチャゼロ！」

「オウヨツ！ 右側八俺ニヤラセテモラウゼ」

そこからさらに100年後

「おいチャチャゼロ、このゴミをどこか倉庫に入れるぞ。期待はずれだ、コイツ役に立たん！」

「諦メルノ力御主人」

「こいつに100年も時間を費やすより魔法を開発したほうが効率が高さそうなんだ。それにこいつの魔力、かなり禍々しくて私には使えそうに無い」

「ケケケツ、コイツ闇魔法ナンテノ使エタリスルンカモナ」

「闇魔法・・・か。それだチャチャゼロよくやった。次の魔法はソレで決まりだ！」

「コイツハドウスンダヨ？」



「そんなものそこらにでも転がしておけ」

「了解ダゼ御主人」

またさらに100年後

「闇魔法も完璧になったな！この魔法は魔力許容量が膨大な私にはなかなか使える！」

「ヤツタナ御主人。デモヨ、ナンデ闇魔法ナンテ思イツイタンダ？」

「ん？何か理由があったような・・・いや、私が天才だからだ！」

「自分デ言ウコトカヨ」

「うるさい！しかしこれで私達は堂々と『悪の魔法使い』を名乗れるな」

「ケケケツ、御主人二ハ才似合イの称号ダナ」

「なんと言っても私達は・・・」

「『誇りある悪』だからな！」

「フハハハハハハハハハ！」

「ケケケケケケケケケケケケ！」

それから100年後

「なあチャチャゼロ、暇だから昔やり残していた研究をしようと思っ  
ているのだが・・・何だったか覚えていないか？」

「ケケケツ、俺が覚エテルワケネエジャネエカヨ」

「そうか、なら今考えている奴を作るか」

「ン？何力新シイコトヲスルノカ？」

「フラスコ型の別荘で通常とは違った時間の流れを作り出そうと考  
え中だ」

「オイオイ、俺ラ八時間ナンテ余ッテルダロウニワザワザ・・・」

「研究して作るのがいい暇つぶしになるんだ、別にお前は手伝った  
ことないのだから文句を言うな」

「昔ノ純粹ダッタ御主人ガ恋シイゼ」

「うるさいぞチャチャゼロ！」

そこからまたまた100年後

「くっそお、なぜだナギ！」

「わりいな、お前の荷物も学園の方には送っておいてやるから」

結局どれだけ言ってもナギの一方的な会話で話は打ち切られ、そのまま麻帆良学園都市に送られることとなった。

「ちっ納得はいかんが3年の辛抱、気分だけでも味わうつもりで行ってやるか」

「ケケケツ、俺ハ3年モ置物扱イカヨツマンネエ」

それから15年後

「まったく、あいつはどこで何をしてるのだ！3年のはずが15年になりあいつの子供が来るそうじゃないか・・・」

「マスターこの人型の土はどうでしょう？」

「私は機嫌が悪いんだ！特に魔力を感じないものなら必要ないからまとめて家の裏に行つて燃やしてしまえ！」

「人型の胸についている白い羽のバッジからは微弱ですが魔力を感じるので……」

「ああ、それは昔私が作ったマジックアイテムだ。何のために作ったか忘れたがそのまま燃やしてもかまわん、耐熱加工してあるから燃えカスを最後に探せば残るはずだ」

「了解しましたマスター、それでは行つてきます」

「今回の妹はどうだ？お前に比べて随分といい子じゃないか」

「ケツ、御主人が頼リナイカラ妹ハアンナ性格ニナツタンダゼ。アマリ苦勞サセンナヨご主人」

「ならお前の性格はなんだと言うのだ、昔から言うことを聞かないではないか」

「昔ノ御主人ハ優シカタゼ。今ハ捻タ性格ニナツテルケドナ」

「お前は昔から口が悪いと……」

「マ、マスター！」

「ん？どうかしたのか茶々丸」

「あの、マスターから燃やすように指示のあつた人型の土、その中

から人が出てきました！」

「なに！どういう理由で土の中に居たのかしらないが殺してしまったのなら仕方が無い」

「いえ、呼吸をしているようなので恐らく生きています」

「なに？チャチャゼロ以前に作った失敗作か何かか？しかし呼吸とわ一体・・・」

「うーむ、よく寝た！つ眩しい！誰かつ誰かカーテンを閉めろ！」

エヴァ達が外に出ると、そこには子供が駄々をこねているような動きで、手で目を覆いながらも足をバタバタとさせている情けない子供の姿があつた。

「私の全盛期ですらこいつの魔力には届かないだと、おい貴様！何者だ！」

その声に駄々をこねている動きをしていた人物が気がつくと、自分を見下ろしているのが気に入らないのかすぐに立ち上がり、腕組みをし強者の余裕を出そうと思つてか、先ほどの失態など気にすることなく不敵な笑みで見下ろす。

しかし、残念ながら身長はどちらもほぼ同じ位なため、見下ろすと言えるか微妙なほどでしかない。

しかし先ほどまで魔力を隠すバツジが体につていたからいいものの、立ち上がることで外れてしまったため恐ろしいほどの魔力が相手を中心に渦巻きだした。

しかし600年も生きているエヴァも、今まで強者として生きてき

たプライドのためか、負けるものと虚勢をはって相手をにらみ続ける。

「ハーツハツハツハ！オレ様が何者かだ？いいだろう答えてやる。俺様は超魔王の称号をもつ魔王の中の魔王、ラハール様だ！」

## 超魔王捨てられる（後書き）

前より綺麗にかけたような気がしなくてもいい・・・

ただプロット考えないと前みたいなことになってしまつかもなあ

魔王の悪とは？ラハール悪の道を進む！（前書き）

エヴァも書いているんですがノリで加持をやっちゃったのでその後に困ってます。

んでまだ始まったばかりのコチラはモチベも高めなので指がパタパタと動いていつの間にか区切りがいいところまで・・

短くても区切りがいいところでやめようと思う

3000字とか決めたら足りない分ムリに進ませて良くないわ



## 魔王の悪とは？ラハール悪の道を進む！

「なに？魔王だと？それも超魔王とはなんだ、ガキの悪魔じゃあるまい？もつとマシな嘘をつくんだな、その程度の嘘人間のガキ程度にしか通じんぞ」

魔界は確かに存在するし上下関係もある、しかし上下関係は自分と同じ種族のみでアニメやゲームのように種族を無視して魔物を纏め上げるなんてことはなく、一部の例外を除いてはケンカ仲間のような相手でしかなかった。

実際はケンカでさえも召喚先での場合に限り、魔界での死は存在の消滅を意味するため暗黙の了解で不干渉となっているのだ。そのためトップに立つ者でも種族の長程度なのだ。

「ガキではない！魔王それも超魔王の称号を持つ魔王に向かって偉そうな態度を取りやがって、不機嫌だ城に帰るぞエトナ、フロン・・  
・ここはどこだ？」

「フン、言っておくがここから簡単に逃げられると思うなよ？経験不足は否めないがそれでも才能のある魔法使い達がお前の魔力に気がつき続々と集まってきている、貴様を捕らえ、その魔力を私の研究に役立たせてもらうぞ」

「む、オレ様の剣がないではないか」

「つて、おい！無視をするな！」

「剣よ、来い！」

「何も来ないな・・・貴様、さてはアホだな」

「違うわっ！剣の奴は封印でもされているのか？しかたない・・・ハアッ」

ラハールと名乗る悪魔から膨大な魔力が溢れだしたかと思うと、突如地面が揺れだした。

「なっなんだ？貴様何をやっている！」

「剣を呼んでいるだけだ、おっ来たな」

ドンッ！

地面から何か飛び出してきたかと思うと、その剣からは神々しいまでの光を纏いながら舞い降りていた、しかし神聖な雰囲気を持ちながらも奥底に邪悪な力でも眠っているのか、光で覆われている下には消えることが想像できないほど力強く黒く光っていた、恐らく光の方は高位の魔法使いが数十人と集まり何重にも封印の魔法がかかっているであろう、その者達が命を懸けてまで封印に力を注いだためかナギの封印すら軽く超えるほどの強固な封印がかけられていた。

その封印魔法は肉眼で確認できるほどで、剣が纏っている光の中にうつすらとだが鎖が見えていた。

「ちっ、気味の悪い光だ・・・まったくオレ様の剣にこんなゴミを巻きつけおって」

そう言い、ムンズ！と鎖を握ったかと思うとたいしたこと無いかのように鎖を千切り、そのまま放り捨ててしまった。

「なっ！あれほどの封印をあっさりと破壊するなど信じられん」

「だから言っただろうが、オレ様は魔王の中の魔王呼ぶときにはラハール様と呼べ！」

たしかにこれほどの魔力を持っているのなら魔王と名乗ってもおかしくないのかもしれん、これほどまで違うとは・・・魔王の存在も否定できんな。

しかし悪魔にもプライドはあるだろう、ましてや魔王ならば・・・。

「おい、お前を長い間私は匿ってやったんだ。礼として私にかかっている封印を解いてくれ」

「ん？よく見れば人間ではないのか。しかしバカか？オレ様がお前の封印をわざわざ解くわけがなかるう」

「何？悪魔であつてもプライドはあるだろう？貴様は魔王でありながらプライドがないのか？」

「有るに決まっているだろうが！だからこそオレはいい子のような行いはしないのだ、なんたつてオレ様は魔王だからな！ハッハッハッハ！」

ちっ、誤算だ。コイツにとっては 魔王＝裏切り、非常識、非道だから普通の者とは逆の価値観を持っているのか。  
むっ、ならそれを逆手に取れば・・・。

「ふう、貴様はいい子ちゃんなのだな」

「何！このオレ様をいい子ちゃんだと？バカにするな！」

「どこからどう見てもな！貴様はまるで周りのお手本のようなやつだ！」

「マスター、演技があまりに下手「うるいさい！」・・・」

「オレ様のどこが周りのお手本のようなんだ、言ってみろ！オレ様は今までお手本になるようなことをしたことなど一切ない！」

「魔王は普通の悪魔よりもよほど悪いことをするのだろうか？」

「当たり前だ！魔王だからな！」

「だからだ！お前は魔王の手本みたいな奴だ、魔王の鏡だ、魔王の職に従順だ！それがいい子ちゃん以外のなんなんだ！」

「なあっ！」

「魔王という職業を全否定し裏切る恐ろしい行為、『相手の為に尽くす』無償の奉仕など一度もしていないだろう！だから貴様は魔王の『いい子ちゃん』なんだ！」

「しっしまったあああ！」

ラハールの称号が『いい子ちゃん（偽）』に変わった。

「フフ、貴様にはお似合いの称号だな！だが私は吸血鬼だが慈悲を与える裏切り行為をしよう・・・貴様に私の封印を解くという魔王に対する裏切り行為をさせてやる！」

「吸血鬼だというのに慈悲の心だと？なんて恐ろしいやつだ！封印は解いてやる、だが感謝はせんぞ『いい子ちゃん』の称号を早く消し去りたいからな」

「バカめ・・・私の封印を解いてお前は感謝するからこそ魔王としての裏切り行為なのだろう？」

「そっそうだった！なんだか腸が煮えくり返る思いだが・・・ええい！ありがとうー！」

「ふふん、私にさらに感謝するがいい！」

「くっそおおお、ありがとうおおお！」

「フハハハハハハハハ！いいぞいいぞ、その感謝受け取っておくとうしょうか、私の心は広いからな！さあ封印を解くのだ！」

「オレ様が『奉仕の心』でオマエの封印を解く！オレ様はこれから生まれ変わるのだ、これから次々と立派な悪行を成してやる！」

「すばらしい心がけだ！さすが魔王、悪魔の行ないとは真逆のすばらしい裏切り行為だ！」

「当然だ！ほらオマエの封印も解いてやったぞ、感謝はいらんぞ！ハッハッハッハ！」

「ラールにとってはエヴァにかかっていた封印もたいしたことはなかったのかいつの間にか解かれていた。」

「なるほどな、親父が昔言っていたのはこういうことのためだったのか・・・しかしなぜだろう、目から汁が・・・」

「おお、魔力が溢れてくるぞ！しかし奴らに見つかるとうるさいが幸いここにはあいつに付けていたバッジがあるからこれを使うか」

エヴァは自分の魔力が戻ってうれしいのかラハールのことなど無視し、一人悠々とバッジをつけ、ラハールはひっそりと涙を流していた。

エヴァがバッジをつけ終わったところで、魔力を警戒してか少し離れた位置で周りを囲むように魔法使い達が集まってきた。

その中の一人代表してか前に出てきた。その男は両手をポケットに手を入れているのに全身からはラハールに対し敵対心むき出しのオーラが出ていた。

「やあエヴァ、そちらの彼は知り合いかな？」

魔王の悪とは？ラハール悪の道を進む！（後書き）

ラハールが・・・

個人的に面白い具合に話が転がっていく感じです

仕事さえなければ・・・・・・悔しい！

配下になりたそうにこちらを見ている（前書き）

眠い・・・

でも日曜の夜にゆっくり寝ることができるようになんとか書き終わ  
りたかったんだ

後日でが悪いと思ったり評価がわるかったら修正するかもしれな  
いです



配下になりたそうにこちらを見ている

「やあエヴァ、そちらの彼は知り合いかな？」

「タカミチか、それに正義の魔法使い様たちも昼間からお出ましとはご苦労なことだ」

「……………質問に答えてくれ、彼は知り合いなのか？」

「そうだな、600年ほど前からの付き合いになるか」

「そんなに昔からの知り合いだったのか、それで彼はこちらに害をなす存在かな？」

「ふん、目の前に相手がいるんだから本人に聞け」

「ああそうだったね。こんにちは、手荒なことはしたくないから話で解決してくれると助かる。まず質問んだけど君の名前を教えてくださいませんか？」

恐らく理解を超えている相手の魔力量に緊張しているのだろう、礼儀正しい彼が自身の名前を出さずに相手の名前を伺っていることからかなり緊張していることがわかる。

「ん、なんだ人間？オレ様は貴様に用などない、さっさと消えろ」

「くっ……………」

一瞬頭に血が上り相手に一撃入れてしまおうかと脳裏をよぎったが、

経験は少ないが本物戦争や戦場を見てきていたため、なんとか自分を抑えることができた。

しかしほかの者達は格上との戦いは経験しておらず、全員でかかればもしくは最初に一撃入れてしまえばなんとかなると思っ

ていた。

「悪魔め俺達を前にして調子に乗るな、これでも食らえ！」

「まっ待つんだガンドルフィーニ君！」

タカミチの静止に反応する前に魔力を込めた弾丸が発砲してしまった。

パンッパンッパンッ！

腕は悪くないのだろう。筋力の鍛えにくい頭部に放たれたら普通なら、あのタカミチでさえ耐えられないだろう。

しかし運が悪いことに彼は人間ではなく、その体に傷一つつけることができなかった。

「ぬ？なんだ貴様は、死にたいのならわざわざケンカを売らんずともいくらでも殺してやる」

剣先を先ほど発砲してきたガンドルフィーニと呼ばれた男に向け、ラハールはゆっくりと歩き出した。

当然ラハールの言動から何をするのか理解はできたが、ラハールが殺そうと意識しているためか無意識に魔力が高まり、他の魔法使い達の動きを止めてしまっていた。

そしてそのまま・・・。

サクッ！

「ぐあああああああ」

その剣先はゆつくりと心臓の位置に差し込まれたが、ラハールの魔力怯んだのか運良く体勢を崩したため、左肩から先が切り落とされたが心臓に剣が突き刺さることはなかった。

「オレの腕が・・・取れ・・・た？」

「動いたらうまく当たらないではないか。慈悲深いオレ様が苦しめよう一息に殺してやろうと言うのだ！」

「うわあああああああ！」

恐怖からか痛みからなのか、恥も外見も無く大声で叫びながらジリと後退りする。少しでもその場から離れようとバランスの取れない体で必死にもがいていた。

しかし無慈悲にも（本人にとっては慈悲深く）息の根を止めようとラハールはガンドルフィーニに歩み寄っているため、周りの魔法使いも近寄るに近寄れない状態だった。

「エヴァ、知り合いなのだろう？彼を止めてくれ！」

「フン、そちらから攻撃してきたのだぞ？まあいい貸し1つだからな。おいラハール、そいつはまだ死にたくないそうだよめてやれ」

「なんだそうなのか？まったく紛らわしいことをしゃがって。まあオレ様は慈悲深いから回復させてやろう”オメガヒール”」

「ぐあああ・・・あ・・・腕が治つ、うぶっ魔力が溢れ・・・て・・・  
・・・オエエエエエ」

ラハールの下に魔方陣が描かれたかと思うと、魔方陣が淡く光だしガンドルフィーニが目に見えて体調が回復してきたかに見えたが、魔方陣の光が次第に強くなっていき辺りあたり一面を光で覆い尽くした数分後、また元の薄暗い森に戻っていた。

しかしそこにいたのは痛みや恐怖で怯えた顔でもなく、胃の中の物をすべてぶちまけ、全身からは異常なほどの汗が噴出し、目は死んだ魚のような・・・生気のカケラも無い男がそこに倒れていた。

「ハーツハツハツハ！貴様なんて顔をしておるのだ・・・冗談だそんな顔をするな、顔が悪いのは色黒なのだろう？わかっておるわしかしそのアホ面氣に入ったぞ『オレ様バッジ』をくれてやろう。

これで貴様はオレ様の配下だ」

そう言うところラハールの顔が写っているバッジをガンドルフィーニの服に勝手に付けると満足したのか我が物顔でエヴァの自宅へと入っていった。

「まったくあいつは自分勝手な・・・茶々丸、あいつが変なことをしないか見張っておけ」

「ですがマスター・・・」

「心配せんでもタカミチのやつはバカではない、どうせじじいを交えてのくだらん会話をするだけだ」

「了解ですマスター、お気をつけて」

「ああ、下っ端共が暴走するかわからんからお前も気をつけておけよ。でわ行ってくる」

「おっおい、エヴァまだ彼が・・・」

「この森から奴を出すのか？昼間に暴れたら一般人にも被害がでるかもしれんぞ？」

「・・・・・・・・」

「奴にとってオマエはただのか弱い人間で、紅き翼の英雄達の一員だと特別視してくれるのは一部の人間だけだ。あまりいい気になるなよ」

「ふう・・・わかったよ。みんな数人の監視を除いて解散してくれ！あとで魔法先生で監視をする順番を決めるから1時間後に学院長室へ！」

タカミチの解散の許可が出ると、すぐにでも緊張から開放されたいのか魔法使い達はすぐにその場から立ち去っていった。

「それにしてもエヴァが忠告してくれるなんて珍しいこともあるもんだ」

「別に死にたければ好きにしろ。ただお前はあいつらほどの才能がないんだ、英雄が相手をするような敵が現れて『戦いたい！』と興奮するのもわかるが、残念ながらお前にはムリだ」

「ハッキリ言うなあ、自分でもわかってはいるんだけどやっぱり心のどこかで諦め切れなくてね・・・いつかは彼らのようにって」

「フン、貴様のことなどどうでもいいから私の家の前で張り込む気満々なあの二人をどうにかしろ。もしラハールに襲い掛かってあいつが暴れたら私の家どころが学園など木っ端微塵だぞ」

「どうでもいいってそんな……。えーっに残っているのは高音君だなもう一人は……。ああ刹那君か彼女達も熱心だなあ」

「私は先に行くぞ」

「ああ、帰るように説得したらすぐに行くから学園長にはそう伝えておいてくれ」

「早く来いよ？でなければジジイの寿命が減って死んでしまうかもしれないからな」

「ん？エヴァそっちは方向が違っじゃないかい？」

「気にするな」

「おーい君達、悪いが今日のところは引いてくれないか？常に監視されていると彼の暴れる原因になるかもしれないんだ」

「高畑先生、でわ彼の監視どうするのです！？被害が出てからでは遅いのですよ！」

「離れた位置で魔法先生方が交代しながら24時間体制で監視するし、僕も暇を見つけては監視に加わるから君たちは心配しなくていい」

い。それよりもこんなに近くで相手にプレッシャーをかける方が危険だ。今日はもう授業も終わる時間だから部屋に戻りなさい」

「・・・わかりました。ですが何かあれば呼んでください、お手伝いしますわ」

ひええええええ、いつの間に封印が切れたんじゃあああああ。

「ありがとう、刹那君もいいね？」

タ、タカミチく・・・タス・・・ケ・・・テ。

「はい、ですが私にも何かあれば連絡を・・・お嬢様になにかあつてはいけませんから」

二人はそういうと寮の方へと向かっていった。

「さて、何もないはずなのになぜか嫌な予感がする。急いで学園長室に向かおう」

タカミチが立ち去ったあとの森には、断続的に聞えてくる悲鳴が子守唄となって、ラハールを心地よい眠りに誘ったのだった。

配下になりたそうにこちらを見ている（後書き）

無慈悲なことを慈悲を持って行うラハール

長年の鬱憤を晴らすかのごとく森の奥へ向かうエヴァ

自分の正直な気持ちを『どうでもいい』の一言でばっさり切られた  
タカミチ

そして何者かの悲鳴

次回どうなる！（何も考えてないので今のオレにもどうなるかサッ  
パリ



悪い奴ほど裏がなく、いい奴ほど裏がある！ オマケ付き（前書き）

なんかしらんがオマケまで書いてしまった。

悪い奴ほど裏がなく、いい奴ほど裏がある！ オマケ付き

エヴァ宅前から解散後の夕方

「悪いなタカミチ、ジジイの奴を連れてくるのに手間取った」

「ああエヴァ、学園長を連れてきてくれたのか……。って学園長！？」

タカミチは、エヴァの後ろを付き人のように数歩下がって入ってきた学園長を見て驚いてしまった。学園長の目はひどく濁っており、何かブツブツと喋っていた。

「生まれてきてごめんなさい、生きていてごめんなさい、こんな頭でごめんなさい」

「・・・ハッ！エヴァ、学園長は一体どうしたんだ？」

するとi p o dを取り出すと得意げに話し出した。

「なにやら孫娘に「頭がキモチワルイ、うちとっても恥かしいわあ。こんな老いばれさつさと死ねばええんや」と24時間ぶっ続けで言われ続けたのがショックだったらしいぞ」

よほど楽しかったのか零れんばかりの笑みを浮かべているが、学園長の近右衛門はその声を聞くと条件反射で体をビクリと震わし、全身から汗が出ててしまうほどのトラウマになってしまっているようである。

「それを24時間!？」

タカミチ達がエヴァ宅から解散後、近右衛門はエヴァによって制裁を加えられ、別荘につれられるとすぐにイスに縛り付けられヘッドホンを装着、先ほどの言葉を延々と聴かされ続けた。

最初は茶々丸など高性能の機械で声を似せて作ったのだと笑っていたのだが、一時間もすると心の余裕が無くなり、焦りからか自然と口数が多くなった。3時間後には聞えるはずのない孫娘に向かって泣きながら大声で許しを請いはじめた。12時間を突破したころにはもうひたすら先ほどの言葉を呟いていたのだが、エヴァが許すことはなくそのまま残りの12時間も放置されていたのだった。

「エヴァ、君がやったのだろうか?何をそんなに怒ってるんだい?」

「フン!ナギが私に登校地獄をかけたのはしっているだろう?あれは学園に通うようにするためだ・・・なのになぜ私は魔力が使えなかったんだ?」

「・・・・・・・・」

「学園結界のメンテナンスの時にだけ戻る魔力、恐らく認識阻害の魔法を私にかけていたのだろうか?情けないことに、この15年間全く気がつかなかった。おそらく茶々丸には禁止ワードにでもして喋らせないようにしていたのだろう、これが許せるものか!そして、お前の学園での立場が幹部的な位置である事を考えると、お前もこの事を知っていたのだろうか?」

確認を取るような言い方ではあったが関与していることを確信していたのか、きつい眼つきでタカミチを睨んでいた。

「・・・すまない」

「今更謝罪などいらん。それに封印も解けたことだ、ナギにも相應の処分を下してやりたいがナギの生死がわからんからな、奴の息子に責任を取ってもらうとするか。ちょうど奴の息子が来る予定らしいからな」

恐らくタカミチがあわてる姿に確信があつたのだろう、今度は一変してニヤニヤしながらタカミチの反応を楽しんでいるようであった。タカミチも長年の付き合いから、エヴァが自分の反応を期待してその発言をしたとわかつてはいても、予想通りの反応を返してしまう。

「封印が解けたのか！？いやそれよりも待ってくれ、ネギ君は何も知らないことなんだ。父親のことをだいぶ尊敬しているようだし頼むから彼を傷つけるようなことはしないでくれ」

「ほう？あんな奴を尊敬しているのか。まあ子供を虐めるような事はほどほどにして現実を教えてやるだけだ。『英雄の子供』だと育てられてきたのだろう？だいぶ他とは違って歪んでいるだろうな。ここを出る予定は今のところないからな、暇潰しに英雄の子供とやらを教育してやろう」

「虐めるのはほどほどでもやめてくれ。それに彼は英雄の息子で間違いないけれど、ネギ君はネギ君なんだ・・・あまりその呼び方は好きじゃない」

「フン！お前も英雄の・・・ナギの息子だから会いに行つたのだろう？私も、名前がネギで子供だ・・・と聞いただけで関わりたいたいなどとは思はずが無い。その息子のネギが親を超えるほどの偉業を成し遂げたとしても・・・それでも奴は『英雄の息子が 当然 英

雄になった』と言われるだけだ、一生な」

「しかしネギ君にそんな・・・」

「私はまだ会ったことすらないんだ、先入観が『英雄の息子』から入るのもしかたないだろう？それに今はあの悪魔、ラハールの扱いについてだろう？そっちの話に切り替えるぞ」

「わかった。まずはあの悪魔はラハールって言っただね？それで種族は？」

「さあな私もそこまで知らん・・・600年前に会ってはいたが会話をしたのはお前らが来る少し前からだからな」

「そうだったのか。それじゃあ彼の魔力・・・おそらくナギさんさえ超えているようだけどエヴァや僕達、学園全員でかかれば抑えられるかい？」

「あいつの回復魔法しか見てはいない、しかしもし攻撃の魔法を出せるのだとしたらまず間違いなく勝てない。それが子供がなら初歩の魔法、サギタ・マギ力でさえ奴が魔力を込めれば1発の威力が・・・タカミチ、お前でもやられるぞ？」

「それほどまでに・・・それじゃあエヴァ、君は彼を呼んでどうするつもりだったんだい？」

「どうすると言われても私だって呼び出すつもりなど毛頭なかったが不慮の事故でな」

「不慮の事故？」

「そう、あれは不慮の事故なんだ。600年も前に感じた魔力など覚えていたはずが無いさ・・・焼却しようとして目覚めてしまったとしてもあれは私のミスではない」

視線をはずしてその場を凌ごうとする姿に、タカミチはついため息が出そうにはなるがそれを堪えて話を続ける。

「出てきてたのはしかたない。再び彼を元にもどせるかい？」

「日本中から睡眠薬でも持ってくるか？」

「彼は寝てたのかい？600年も！？」

「私が見つけた時には、既に固くなった土に覆われていたんだ、恐らく私が見つけた600年前よりもさらに以前から寝ていたのだろ  
うさ」

600年前から寝ているのにも驚きだがそれ以上と聞くと苦笑するしかない。

「それじゃあ600年も寝てる彼の年齢はどれくらいなのかな？それに彼の種族は？それがわかれば対処法があるかもしれない」

「奴の年齢はしらん。そして奴の種族だが魔王だそうだが」

「魔王？それは種族とは違うと思うが」

「なら超魔王だそうだが」

「エヴァ・・・」

タカミチは可哀相なものを見るような目でエヴァをやさしく見つめた。

「おい、奴がそう言ったんだぞ！嘘ではない！そんな目で私を見るなああ！」

「ハハハ、エヴァそん、ヴォエエエエ」

エヴァが腕を振り回しながらタカミチの胸を叩いた。

いままでの魔力が込められていない拳など、特に構えることなく受け止めることができたのだが、これまでと違い相当の魔力が込められた拳を構えるでもなく咸卦法を使うことも無く受けたため、タカミチはきりもみ状態になりながら窓の外へと放り出され暗闇の中へと消えていった。

「ジジイ、私の知っていることはすべて話したぞ。ではな」

学園長の拷問が効いていないことがわかってしているエヴァは、それだけを告げるとマントをひるがえしそのまま闇の中へと消えていった。

「ふう・・・やはりバレとったのか。つまらんのお。さあてタカミチ君を回収してやらねばのお」

それだけ言うと、その老人は窓の外へと身を乗り出し夜の闇へと消えていった。

## おまけ編

（本編の続きの流れで入っていますがi fの世界です。この話の設定が続くわけではありませんので注意）

## おまけ1

ネタ？いえシモネタです。

「先生の寝顔かわいいなあ」

アスナはその日の夕刊を配り終え帰宅しようとしていたところ、愛しの高畑先生が森の側で倒れていたため神様からの贈り物だと喜んで自宅へとお持ち帰りした。

好きな男性との一夜、しかも今日は親友のこのかは図書館組みの方にお泊りとなっており二人っきりの状態だった。しかし、さすがの暴走少女であるアスナでも倒れているような体調が悪い人を襲うようなことができるはずもなく、寝顔をスケッチブックに色々な角度から描いて一晩を過ごした。

そして上半身から下半身を描こうとしたところで、えんぴつを持つ手の動きが止まった。

「おつき、高畑先生ってやっぱり男の人なんだ・・・」

「アスナ君僕は昔から男だよ？」

「へっ？起きてたんですか？いえその・・・朝だから男のあれがゴニョゴニョ」



「昔から親みたいな位置にいたから母親と思い込んでいたのか！。それはわるかったなあ」

「いや、別にそんな勘違いをしていたわけでは・・・高畑先生ってちよつと朝が弱いのかそれとも頭が？」

「それに今まで銭湯でも男湯に入って行つたのを見たことあるだろ？もし女だつたら危ない人じゃないか・・・いや男としてはうれし  
いんだけどね」

「先生って朝弱いんですね・・・セクハラはキモチワルイですよ」

「え？僕は紳士だから女性にはとってもキモチイイ事をしてあげ「  
死ね！」フギヤア！」

「ふう、悪霊でも乗り移つてたのね・・・悪霊退散つと」

アスナの拳が効いたのか高畑先生と悪霊は萎え、二度と立ち上がることは無かった。

おまけ2（シモネタではありません！）

次の日、そこにはいつになく真剣な目をした学園長がいた。

「タカミチ君、君に重大な任務を与える」

「へっ？どうしたんですか学園長？そんな真面目な顔をするなんて」

「うるさいわ！最近は何も言わん言わんようになったのう。まあ今はそんなことよりも大変なことがあるのじゃ！」

「確かに、エヴァの魔力の問題はまだしもあの悪魔への対抗策は必要でしょう」

「うむ、しかしそれ以上に大変なことになったのじゃ！夜になんとかエヴァともう一度接触したいと思ったが本人からでは話も聞いてくれんと思ひ茶々丸君と接触したんじゃ」

「まあたしかに昨日は魔力も戻ってかテンションがいつもより高かったですからね。大丈夫とは思いますが落ち着いてからのほうがいいでしょう」

「うむ、そこで茶々丸君にそのことで間を取り持つ役を頼もうと思つたのじゃ。しかしワシが話しかけたところで突然逃げ出されての。しかたなしに追いかけて『特に攻撃するつもりはない』と言って彼女の腕を掴んだのじゃが・・・」

「エヴァは大丈夫だけど、茶々丸君は戦闘はできるが戦闘向きではないからエヴァから逃げ出すように指示があつたのかもしれないなあ」

ハハハと爽やかに笑うタカミチとは対象的に学園長は怒りの形相で怒鳴りだした。

「笑い事じゃないわい！あのあと指示があつたのじやろうが茶々丸君が『もう体を売るのは嫌なんです！』と言つて走つて逃げていったのじゃ、しかも本当に涙まで流してのお。ワシはその言葉に驚いて手を離してしまつたのじゃが・・・しかし運が悪いことにその場面を孫娘のこのかに見られてしまつてのお。そこからはもうエヴァの拷問で聞かされた言葉よりも汚い言葉を吐き続けられて・・・ワシこのままじゃ本当に死んでしまう！あの悪魔よりもまずはこのかとの仲を回復するのに力をいれてくれい！頼む！」

学園長室には昨日よりも老けて見える老人と、世界の平和か老人の心の平和、どちらを優先するか悩むおっさんがいた。

そして数時間もその部屋にいることになつたのだが、それはタカミチが『何よりも孫娘との関係改善に力を入れます』との契約書を書くまで学園長がタカミチの泣きじやくりながら袖を離さなかつたためらしい。

悪い奴ほど裏がなく、いい奴ほど裏がある！ オマケ付き（後書き）

エヴァが進まねえ

つまらないかもしれない・・・しかしそれでもオレには初作品なわけ

あちらもがんばります。

# 1話修正してみたのを公開（続かないと思うよ）（前書き）

気に入らない表現や会話を修正していったら別の物語になってしまったんだ。

これが孔明の罫ってやつか

年に1回更新すればええかなーって程度で活動するかも？

最近の一言！

仕事が急がしいい

# 1話修正してみたのを公開（続かないと思うよ

ドドドド・・・

ウイイイイイン・・・

パンッパンッパンッ・・・

死ねええええ・・・

ウルサイ、オレ様の部屋を改装するような予定などあったか？

まるで自分の隣で工事が行われているような・・・

ドリルの音かと思えばチェーンソーのような、中には銃声やらいかにもアホそうな声まで聞えたような。

くっそお小さい癖にいつの間にか頑丈になりやがって・・・あっそうだ捨ててきてしまえばいいんだ。

やっと静かになった、ただ急に冷えたした。まあこの程度、超魔王になったオレ様には涼しい程度だがな。

さようなら魔王様！プリンの恨みは恐ろしいのだ！時空ゲートをこの世界以外のランダムにしようと・・・よし、でわ行ってらっしゃいませ魔王様、魔王城は私がもらっわっ！

ポイツ！

アホな声が聞えたと思ったらすぐに静かになった、これで静かに眠れ・・・る。

100年後

「ねえ、これは何かな？チャチャゼロ」

そこには、某魔神に捨てられてからも動くことなく寝続けた結果、砂に埋もれ、雨に晒され続けた結果、自称超魔王を名乗っている人物は100年の長い年月によって表面を石のように硬くなった土に覆われてしまっているのだった。

そしてそれを見つけたのは吸血鬼化してまだ十数年ほど、後のドールマスターの異名を持つことになるエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとその従者チャチャゼロだった。

「サアナ、デモコノ魔力はスゲエゼ御主人。モツテ帰レバ何力使イ道ガアルカモシレネエゼ」

「言葉遣いはもうちょっとどうにかならないの？でもそうだね土に覆われているみたいだけど形から見るに人が入っているのかな？」

「御主人ハコレカラ何百年ト生キルンダゼ？言葉ナンテスグニ荒クナルツチマウツテ。ソレヨリコイツハ人ジャナイダロ、随分ト長い間ココニ横タワツテイタンドロウゼ、デナケリヤコンナ土ニ覆ワレネエツテ」

「言葉遣いは兎も角として。とにかくもって帰ろう、この魔力を私が扱えるようになれば自分の身を守るのに使えるはず」

「アーアー、御主人ハ考エガ甘イゼ？考エ方モ時間ガタテバ狡猾ニナルダロウケドヨ」

「文句言いわない！ほら、足を持って！！コイツをもって帰るよ」

「アイサー御主人」

それから100年後

「おいチャチャゼロ！100年も研究るんだ、お前も何か考え付かないのか！？」



「知ラネエヨ、ソレヨリモソイツノ魔力ヲ隠スアイテムヲ早く作ツテクレ。ヤツラ、ソイツノ魔力ニ釣ラレテジャウジャ集マツテクルゼ」

「わかったわかった、でももう100年も戦ってるんだ、国から軍でも出されない限り大丈夫だろ」

「最近ノ御主人ハマツタク戦ツテナイダロ！マア切り刻ムノモ悪クハネエケドナ」

「おいつ言葉遣い！ったく100年間まったくの進歩なしかチャチャゼロ」

「まったくお前には学習と言う言葉が「既ニ御主人モコツチ側ダケドナー、マアイイ。外の掃除ニ行ツテクゼ」

「はいはいっすぐ終わらせてこ・・・来なさいよ」

「アイアイコイテキマスゼ御主人ー」

「あとで泣かす！！」

さらに100年後

「ったくこの土男、魔力はあるはずなのに多すぎて私の作ったアイテムが壊れるじゃないか。壊して意識が戻ると困るから手が出せないことをいいことに・・・実はコイツ意識があるんじゃないか？」

「ケケケツ、御主人。意識ガアルノニ100年モ土ニツツマレテルヤツガイルンダヨ。ドーセ封印デモサレテルンダロ」

「ソレヨリ御主人、今回は軍ガ動イテルミテエダゼ？ヤリガイハアルガ流石ニ俺一人ジャ敵シイゾ」

「ああ最近攻めてきてるのは西の奴らだったか？ふう、別の場所を探さないとな。さつさと終わらせる！行くぞチャチャゼロ！！」

「オウヨツ！右側八俺ニヤラセテモラウゼ」

そこからさらに100年後

「おいチャチャゼロ、このゴミをどこか倉庫に入れるぞ。期待はずれだ、コイツ役に立たん！」

「諦メルノカ御主人」

「こいつに100年も時間を費やすより魔法を開発したほうが効率が悪そうなんだ。それにこいつの魔力、かなり禍々しくて私には使えそうに無い」

「ケケケツ、コイツ闇魔法ナンテノ使エタリスルンカモナ」

「闇魔法・・・か。それだチャチャゼロ！お前にしてはよくやった。

次の魔法はソレで決まりだ！」

「コイツハドウスンダヨ？」

「そんなものそこらにでも転がしておけ」

「了解、倉庫ニデモ入レテオクゼ御主人」

またさらに100年後

「闇魔法も完璧になったな！この魔法は魔力許容量が膨大な私にはなかなか使える！」

「ヤツタナ御主人。デモヨ、ナンデ闇魔法ナンテ思イツイタンダ？」

「ん？何か理由があつたような・・・いや、私が天才だからだ！」

「自分デ言ウコトカヨ」

「うるさい！しかしこれで私達は堂々と『悪の魔法使い』を名乗れるな」

「ケケケツ、御主人二八才似合イの称号ダナ」

「なんと言つても私達は・・・」

「『誇りある悪』だからな！」

「フハハハハハハハハハ！」

「ケケケケケケケケケケ！」

それから100年後

「なあチャチャゼロ、暇だから昔やり残していた研究をしようと思  
っているのだが・・・何だったか覚えていないか？」

「ケケケツ、俺ガ覚エテルワケネエジャネエカヨ」

「そうか、なら今考えている奴を作るか」

「ン？何力新シイコトヲスルノカ？」

「フラスコ型の別荘で通常とは違った時間の流れを作り出そうと考  
え中だ」

「オイオイ、俺ラ八時間ナンテ余ッテルダロウニワザワザ・・・」

「研究して作るのがいい暇つぶしになるんだ、別にお前は手伝う気  
がないのだから文句を言っな」

「昔ノ純粹ダツタ御主人ガ恋シイゼ、カムバック御主人ー！！」

「やかましいわー!!」

「ダツテ暇ダモノ」

そこからまたまた100年後

「くっそお、なぜだナギ!」

「わりいな、お前の荷物も学園の方には送っておいてやるから」

結局どれだけ言ってもナギの一方的な会話で話は打ち切られ、そのまま麻帆良学園都市に送られることとなった。

「ちっ納得はいかんが3年の辛抱、気分だけでも味わうつもりで行ってやるか」

「ケケケツ、俺ハ3年モ置物扱イカヨツマンネエ」

それから15年後

とある学園、その森の中にひっそりと建っているログハウスの中・

・

「まったく、あいつはどこで何をしてるのだ！3年のはずが15年になりなぜかあいつの子供が来るそうじゃないか・・・まったく忌々しい。」

「マスターこの人型の土はどうしましょう？」

「私は機嫌が悪いんだ！特に魔力を感じないものなら必要ないからまとめて家の裏に行つて燃やしてしまえ！」

「人型の胸についている白い羽のバッジからは微弱ですが魔力を感じるので・・・」

「ああ、それは昔私が作ったマジックアイテムだ。確か魔力を抑えるモノだったはずだが・・・まあ覚えてないならどうでもいいだろ、耐熱加工してあるから燃えカスの中から最後に探しておけ」

「了解ですマスター、それでは行つてきます」

「フフン！今回の妹はどうだ？お前に比べて随分と従順じゃないか」

「ケツ、御主人が頼リナイカラ妹ハアンナ性格ニナツタンダゼ。アマリ苦勞サセンナヨ御主人」

「ならお前の性格はなんだと言うのだ、昔から言うことを聞かないではないか」

「昔ノ御主人ハ優シカタゼー。今ハ捻々性格ニナツテルケドナ」

「お前は昔から口が悪いと・・・」

と口論（エヴァの一方的な）しているところに茶々丸があわてて戻ってきた。

「マ、マスター！」

「ん？どうかした茶々丸」

「あの、マスターから廃棄するよう指示のあった人型の土、その中から人のようなものが出てきました！」

「なに！という理由で土の中に居たのかしらないが殺してしまつたのなら仕方が無い、ジジイにばれる前に遺棄してしまえ」

「いえ、人に似ているのですが人ではないようです・・・焼却炉の中でも普通に呼吸をしているようなので恐らくですが生きています」

「ほう？おいチャチャゼロ、以前に作った失敗作に呼吸ができるような人形など作ったか？」

「シラネーヨ」

「チッおい茶々丸、焼却炉に案内しろ」

茶々丸に案内されて着いた先では焼却炉の中で子供が平然と横になっていた。

「なあ茶々丸」

「はい、なんでしょうマスター」

「コイツ、まだ焼却炉の中にいるように見えるのだが・・・」

「はいマスター、焼却炉の中にいますね」

「お前は何も思わんのか？」

「大変気持ちのよさそうに寝ている子供が「アホか貴様！どーして焼却炉の火を止めるなり助け出さなかった！？」・・・特に命令がなかったのだ」

「あ、頭が痛い・・・貴様には一度、道德というものを教えんならんようだ」

「しかしコイツ本当に生きているようだな。よし、この棒を穴に中に突っ込んでやろう」

エヴァが土がはげて顕になった物体A（人型）の鼻にクシャミを誘うかのように鼻の穴に抜き差ししている。

なぜかエヴァの横にいる茶々丸は腰をクネクネさせているが・・・。

「なあ茶々丸？保健体育は習得しているのか？」

「ハイ！どんな体位も完璧です（キリッ）」



「（クーリングオフって何日だったかな？

できれば姉も引き取ってくれると助かるのだが）」

残念な従者に哀れな視線を向けるのだが何を勘違いしたのか照れている本当に残念な従者がいた。

「その、まだマスターには早いと思うのです・・・しかし！しかしですよマスター！マスターが求めるのならコチラが攻めで手を打ちましょう！！取りあえず私が姉でSです。マスターがが妹でM。どうせなら姉さんも巻き込んで3姉妹プレイなんていかがでしょう？Sは私だけで十分ですから姉さんにも神経をつけてあげてM調きよ「だまれよポンコツ」」

「さすがの私でもココまでコケにするととは思わなかった「ふう仕方がありませんね。フッフッ、マスターもSへいらっしやい」」

指を一本一本折り曲げ、怪しげな雰囲気をかもしながら誘っている。

「おい、何を勘違いしている！いい加減その方向の発言はやめんか！」

「いいえ！私はSです。そこは譲れない！なぜなら私のぽりすい（キリッ）」

「だくくらく・・・SMちがうわボケエエエエエ」

「私はS、それが私のジャスティス（キリッ）」

しかし、ぽりすいも捨てがたい。そうは思いませんかマスター？」

「フッ、フッフ、フハハハハハハ、貴様のマイクはイカれている

ようだ！貴様を解体し、あのマッド共に叩きつけてくれる！！」

「ふふつ、貴様に私が倒せるかな？来い！魔王よ！！」

「おい、魔王が挑戦者っぽくなってるぞ、ってだーれが魔王か！！」

「マスター（魔王）はあと2回の変身を残している」

「残しとらんわあああああ」

怒りのあまりエヴァの髪が逆立ち周囲には負のオーラが立ち上っていた。

しかし、茶々丸に登録されている辞書には自重の文字は残念ながら存在しなかった。

「まつまさか！伝説のスーパーの野菜人！！」

これは今晚のおかずにはニンニクとネギをふんだんに使用した野菜炒めを・・・」

「茶々丸ううう！覚悟おおおお」

その夜・・・

「グスン・・・初めてがネギって・・・ネギって・・・」

「大丈夫、よくあることです。それよりも始めては今日ですべて終えてしましましょう」

その夜から、学園のはずれにある森から少女の悲鳴が聞こえる怪談が噂されるようになった。

1話修正してみたのを公開（続かないと思うよ）（後書き）

どうしてこうなった!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7582k/>

---

麻帆良戦記ディスガイア

2011年10月6日16時31分発行